International IC Association of Japan (IIAJ)

IIAJ

IC NEWS No.116

(社)国際IC日本協会機関誌

発行年月日　2008年8月25日
発　行　所　(社) 国際IC日本協会
〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-54-14
Tel:03-5429-1156 Fax:03-5429-1157
E-mail:LEB03055@nifty.com
発　行　人　橋本　徹
編　集　人　長野　清志
頒　　価　1部　200円

『今、求められる真のリーダーシップとは』

― 共に生きる世界と私 ―

世の中に蔓延する　偽り、嘘、見栄・・・
日本は、世界は、
いったいどこへ向かうのだろう

信頼と思いやりを取り戻すために
今、求められる真のリーダーシップとは・・・

考えよう一人ひとりの役割を
一人ひとりの姿が創るこの世界を
一人ひとりの知恵がはぐくむ信頼を

政治家が悪いとぼやく人
人を大切にしないと嘆く人
人より金が大事なのかと怒る人

みんな、集まろう、考えよう、語り合おう
未来へ向かう道を求めて

第31回IC国際会議は、2008年6月6日(金)～8日(日)にマホロバ・マインズ三浦にて開催されました。11カ国、約70名の参加者が20代から80代まで年齢の差も、国や人種、宗教、文化の違いを超えて、和やかなうちに充実した話合いが行われました。今回は韓国MRA/ICの新総裁にも参加いただき、両国の協力関係にさらに大きな発展が見られました。橋本徹会長を囲む意見交換では、「信念と真心」からのお話を、またシリウス・インスティチュート代表の船橋晴雄氏による「長く栄える創業者たちの人間性とリーダーシップ」では、日本人の文化や人間性の深いお話をお聞きすることができました。また海外からの青年たちは実際の生活の中での経験を語り、さらにスイス在住で国際機関のリーダーシップ・トレーニングに係わるアリス・カデールさんのワークショップでは、「リーダーとしての基本的考え方やリスクの解決法」などの講義がありました。また、会議の終了後にも東京や小田原での会合や学校訪問等が行われました。

■主な内容
Contents

◇2008年IC国際会議レポート　p.1-9
□キム・サンウォン韓国MRA/IC新総裁ほか
□橋本徹会長を囲んでの意見交換
□講演およびワークショップ
◇国際会議後のプログラム　p.10-13
小学校訪問などの交流／ホームステイ
◇ミニHOHOレポート　p.14
◇中国国際交流協会代表団来日　p.15
◇ICニュース　p.16

◇ 開会式　6月6日（金）

◆国に対する‘失望と逃避’

オルハ・フーズ（ウクライナ、大学生）

ウクライナは、地理的にはヨーロッパの中心に位置しています。農業は盛んですし、鉱物資源も豊富です。そして気候も温暖です。そのため常に外部の侵略者の関心の的でした。何世紀もの長い間、ウクライナは、〈自分たちは小さな国であり、常に周りには大きな兄がいて、自分たちに命令し、支配されている〉と思っていました。ソ連に占領されていた日々も例外ではありません。1920年代の村人たちは、自分たちの財産をすべて許可なく取り上げられ、大きな共同体とされました。その後70年の間、ウクライナの人々は、意志のあるなしに拘らず、それらの農場で働いてきたのです。そのうちに、これは自分たちの物ではないのだから、畑や物や農場や国もどうなってもいいと思うようになりました。

ウクライナでの政治的な現実は、とても難しい局面も迎えています。何かしっかりとした信念や変化に挑むといったリーダーシップがないからです。心の奥深くで、ほとんどのウクライナの人々は、自分たちの過去と同様に現実の状態にも、不満を感じています。

しかし私たちは、怠け者であり、小心者です。多くの人々は、彼らの内面の過去の痛みや不満を閉じ込めたまま、安全に、ひまわりや、マロー（ウクライナの国花）で飾り立てて、閉じこもっています。そして、「すべてはうまくいっている、これ以上悪くならないだろうし、隣人よりまだましだ」と言い続けて、“真の和解”から逃避しているのです。

私個人としては、自分の国のことを真剣に考えています。そしてこの問題はウクライナの国だけの問題ではないと感じています。私の個人的な心配事にとどまらずに、他の人とも一緒に話し合いたいのです。私は、どんなリーダーシップが日本では必要なのかを知りたいと思います。各国の問題や国際的な問題を分かち合い、答えを導き出すことで、それぞれの国で役割を果すことができると思います。

◇「問題に解答を与えるMRA/IC」

世界道徳再武装(MRA/IC)韓国総裁　金　祥源（キム・サンウォン）

韓国と日本は長い歴史を通じ、政治、経済、社会、文化などあらゆる面で相互理解し、協力し、両国の正しい発展のために努力してきました。特に1960年代からは道徳再武装（MRA/IC）運動で両国間にあった過去の過ちに対し、謝罪と和解を通じて問題に対する解答を探そうと努力してきました。このようなMRA/IC活動は、日韓両国が国際舞台で相互協力し、世界平和と人類繁栄に大きく寄与するものと確信しています。

韓国のMRA/ICは、小学生、中学生、高校生そして大学生に至るまで主に青少年を対象に全国的に活動を展開しており、訓練研修事業、国際活動事業、学生団員活動事業、出版広報事業、学生表彰事業、そして各種集会などを活発に推進しています。全国に10ヶ所の地域本部と各学校別にMRA/ICチームを組織して独自の活動を展開しており、MRA/IC韓国本部と緊密な連絡協力の下に推進しています。

昨年は、大韓民国政府によって実施された5月青少年の月」の表彰式において、国家と社会、そして青少年に寄与した業績を認められ、MRA/IC韓国本部が最優秀団体として選定され、大統領から表彰されました。

今、世界のあらゆるところで、甚大な災難や飢餓、疾病で多くの人々が亡くなったり苦痛に喘いでいます。

また、人間のエゴや憎悪から戦争やテロのような暴力が起こっています。誤った偏見や過度の欲望によって、世界に不信や対立が蔓延しています。また、世界中で性生活の乱れや不純な言行によって離婚などの家庭の破綻が起こっています。道徳の喪失によって、様々な問題点が国内外でどんどん発生しているのです。

まさにMRAの創始者、フランク・ブックマン（Frank Buchman）博士が70年前に憂慮されていた問題が今もなお、私たちの周囲や国際社会で毎日のように発生していることは、大変遺憾なことであり、我々MRA/ICの使命について再度考えさせられます。MRA/IC運動は、長い間困難や問題のある場所に解答を導き出してきました。また、必ず解答を得ようと努力するのが、我々MRA/ICです。

今回の第31回IC国際会議のテーマは「今、求められる真のリーダーシップとは－共に生きる世界と私－」ですが、我々がみなMRA/IC生活を通じた自身の変化のため努力し、また家庭と社会、国家、世界の変化のため、力を合わせましょう。そして、MRA/IC精神によって武装した指導者となりましょう。正しいリーダーシップは正にMRA/IC精神の基礎だと思います。最後に、今回のIC国際会議が日韓両国の発展と、更には美しい世界の創造に大きく寄与することを願います。

◇橋本 徹 国際IC日本協会会長を囲んでの意見交換「私の考える真のリーダーシップとは？」

“信念と真心の溢れることば”

◇母の影響を強く受けた生い立ち

岡山県高梁市には高校を卒業するまでの18年間暮らしました。私の両親は2人とも教師で、父は仏教、母はキリスト教の信仰があり、家の中に、仏壇と神棚に十字架が混在している中で育ちました。とりわけ母の影響を強く受けたと思います。

高校3年の時に大病を患って一冬、病床に伏したことがありました。それまでは、健康で、すべてうまくいっていたために、自信家で、自分を過信していました。病気をきっかけに、何か自分を超えたものの存在を悟りました。その時に頼りになったのが、それまで学んでいた聖書の教えでした。そして聖書を勉強し、キリスト教の洗礼を受け、信仰を持つようになりました。人間というものは、挫折をして打ち砕かれた時、初めて何か大いなるものを信頼するようになると思います。

橋本徹氏・プロフィール

昭和9年岡山県生まれ。東京大学法学部卒。富士銀行入行。フルブライト留学生として渡米。アメリカ・ロンドンなど海外駐在経験豊富。
平成3年富士銀行頭取に就任。会長を歴任後、平成14年に退任。現在ドイツ証券会長。平成13年に国際IC日本協会会長に就任。

◇困難にぶつかった時こそ発揮されるリーダーシップ

その後、故郷を離れて東京へ出て、大学を終え、富士銀行に入行しました。そのトップの座である頭取に着任したときに、試練が待ち受けていました。ある支店で不正が起き、巨額な損失を受けるという事件が起きました。巧みに複数の銀行やノンバンクを巻込んだ証書の偽造という不正で、発覚も遅れ巨額な損失が出たのです。そのことで、国会に証人喚問という事態にまでなってしまいました。この時は大変悩みました。国会の席で難しい質問があったら、どのように答弁したらよいのかと思ったからです。その時私は、〈人間としてベストを尽し、知っていることはすべて隠さず申し上げよう〉と神に誓いました。すると心が落ち着きました。そしてすべてを申し上げ、この事態を切り抜けることができました。

リーダーは常に謙虚で、自己を過信しないことが大切だと思います。銀行内に不正を働く者が出てきたことは、何か銀行内全体に問題が潜んでいるのではないかと感じたことをきっかけに、14、5人の役員で分担

して全国津々浦々まで廻り、行員との直接対話を行いました。国内180店舗、海外50店舗すべてを廻り、直接行員たちに語りかけ、彼らの意見を聞きました。これが大変役に立ちました。リーダーとして、すべての人に耳を傾けることが大切だと実感しました。

もう一つリーダーとして大切なことがあります。企業のリーダー、いわゆる社長というものは、皆に選ばれた訳ではありませんから、独裁者といってもいい立場にあります。あまり長く続けず、自分の賞味期限がきれた場合は、自分から降りるべきだと思います。会社によっては、社内に一応の民主的制度がある場合はありますが、事実上は、前社長が次の社長を選ぶようになっていますから、自分の引き際を察知するべきだと思います。

◇"リーダーはサーバント"

リーダーは、同時にサーバントであることを忘れてはいけません。お客様には、良いサービスを心がけることです。官僚も、パブリック・サーバント（公僕）であること、国民に仕える"しもべ"であると思います。リーダーは、企業の社長など、大きな責任を負う者だけではなく、各地域でも、小さな村でも、それぞれのリーダーが必要であり、どんな場面においても、リーダーはサーバントであることを忘れずに、心して行動していくことが大切だと思います。

◇講演

「長く栄える企業を築いた創業者たちの人間性とリーダーシップ」

講演者　船橋　晴雄（シリウス・インスティチュート（株）代表取締役）

ICの会議に参加するのは、昨年のインドでの会議に続きまして、2回目です。

伝統の技術

本日は皆さんにある音を聴いてもらいたいと思いまして、鉄の風鈴を持って参りました。鉄というのは、非常にいい音がするのです。これは明珍さんという方が作っているのですが、明珍家というのは、代々鎧兜を作ってきました。非常に難しい技術を開発したため、姫路藩主・酒井家のお抱え鎧師でした。

しかし明治になって、明珍家が作っていた鎧兜の技術というのは、もはや役に立たなくなってしまったのです。鎧兜の需要がなくなり困りましたが、そこで彼らが考えたのが、火箸です。鉄を鍛える技術を火箸に応用しました。昔はどこの家にも火鉢がありましたので需要がありました。しかし、それも昭和30年代には石油ヒーターなどに取って代わられました。そこでまた考えました。この火箸の硬さが、とてもよく澄んだいい音を生むことに着目し、この音を利用して鉄の風鈴を作ろうと思い立ったのです。

一貫しているのは彼らの強みである、鉄を鍛えるという技術です。それを、時代の変化にうまく適応させて生き抜いてきたというわけです。

このように日本の企業に一番多いのは、伝統産業、たとえば茶道など、職人の技術で道具類を作る企業です。概して日本の企業の多くはファミリービジネスです。規模はそれほど大きくない企業です。それでは、なぜ今まで多くの小規模な企業が、これほどの長寿企業として多く存続してきたのかと言えば、それは我々のもつ自然条件が大きな要因かと思います。海外に比べて長寿企業が生きやすい条件が整っていたと言えるでしょう。

長寿企業の意識

私は、40の企業を訪ね、お話を伺って参りましたが、そこでは共通のことが見えてきます。それは、

先代から受継いできたバトンを次の世代に繋いでいくという意識が見られることです。受け継いできたもの（技術）というのは、自分のものであると同時に、自分のものではない、授かったものという考え方を持っているという点が一つ重要な点です。ですから最近よく言われているような、企業とは株主のものだという考え方とは対照的です。そしてまた企業というのは、社会的な存在なのだという意識があります。

このように先代から受継いだバトンを、できれば先代から受継いだのより少し大きなバトンを次の世代に受継ぐという意識が共通しているのです。そのため、短期的な利益よりももっと長期的なスパンで、例えば1000年という単位で物事を考えているのです。

このような成功体験から学ぶことは、まず足元を見て、変えるものと変えないものを見極める、自分の強みは何かをよく考える。例えば明珍家には、代々受継いだ家訓というものがあるのですが、ここで大事なことは、家訓など書かれたものそれ自体ではなく、家訓に書いてあることを体得しているかということです。そして体得したものを次の世代に受継いでいくということではないでしょうか。体得したということは、書かれたものよりも何より大きなメッセージとなって、受継がれていくのでないでしょうか。つまり、そのある一世代がしっかりと体得しなければ、伝統が伝わっていかない訳です。

企業社会における倫理観

これは教育にも、企業においても、同じことが言えます。日本企業の倫理問題で最も大切なことは、コンプライアンスのマニュアルよりも、個々人がしっかりとした倫理観を持っているかということに尽きると思います。マニュアルというのは、結局人間自身を追い込むのです。そして会社内の雰囲気がだんだん悪くなっていくのです。

今日、CSRやコンプライアンスについてかなり狭い考え方が普通に見られることはとても残念に思います。現在多くの企業が持つCSRへの意識レベルというのは、CSR＝企業倫理という、とても限定的で狭小なもので、さらに一歩先の議論、つまり個人の倫理、社会的貢献や倫理観まで目を向けている企業が少ないように思います。

企業にお話を伺っていて一番多い反応というのが、CSRは「面倒くさい」「そこまで手が回らない」というものです。そのような意識の経営者が多いことは、とても残念ですが、私は決して絶望していません。「企業が社会にいかに貢献していくか」という意識のない経営者というのは、次第に時代遅れになっていくのだろうと考えています。時代は、企業の社会的貢献・倫理観のない企業を許しては措かなくなるでしょう。

◇パネル・ディスカッション

「今、家庭、職場、学校、社会で、そして、国に求められているリーダーシップとは？」

各分野からの経験豊かな４名の方々に、それぞれ理想のリーダー像等について貴重なお話をして頂きました。

○足立　憲昭・・・ イオン株式会社・グループ経営監査室内部統制担当、会社では「欲を捨てること、無私の心になると、他人の話がよく聴こえるようになる」と語る。

「部下を自立させるには」

《最近あらためて気づかされたのは、リーダーは、仕事を一人で抱えてはいけないということです。2年程前、貧血で駅のホームに倒れ、深く反省しました。「今自分がいなくなったら、会社や家族はどうなるか、仕事を一人で抱え込んで倒れるほうが無責任ではないか」と考え、それ以後、後任を育てることがより一層重要なテーマとなりました。部下に考えさせずに命令を下すばかりでは部下は自立できません。部下を育てる上で必要なことは、ひたすら忍耐して褒めることです。リーダーはいつも長い目で

パネル・ディスカッションにて
（左から、パネリストの高橋久子、谷川和穂、足立憲昭、鈴木恒美の各氏と司会の佐々木淳氏）

先を予測し多角的に考え、メンバーに最終目標をはっきりと示し、そのために必要な準備をさせるべきなのです。新しいリーダー像とは、会社では部下の目線で自立を促し、家庭では妻や子供の目線で対等に話し合える人です。》

○谷川　和穂 ・・・ 元衆議院議員。ご両親は広島と長崎のご出身。

「政治における偉大な愛」

《リーダーに必要な資質とは何か、それは「愛」だと思います。戦後アメリカに留学した時、ワシントンDCにあるリンカーン像の、かの有名な「人民の人民による人民のための政治」という刻印を見て、大きな衝撃を受けました。奴隷という立場の黒人たちにリンカーンは、「政治はあなたたちのためのものである」と説いたからこそ、後世に残る演説になったのだとその時直感し、今でも鮮明に覚えています。リーダーシップとは、実は下から上に流れるものなのです。大きな「愛」を持ったリーダーが、下の立場の人々に大きな愛を持って接することができ、そこで掘り起こされたリーダーシップによって行動する、それこそが理想の政治だと思います。》

○鈴木　恒美 ・・・ 小田原市立国府津小学校教諭。4年生の40人の子供たちのクラスを受け持つ。

「教師としてできることは」

《リーダーシップにあふれる校長先生に出会ったことがありました。教師として児童のことを第一に考え、先生達が働きやすい環境を整えてくれたのです。様々な改革を行ったその校長先生は、常に「児童のために、先生達のやりやすいように。何かあれば私が責任を持つ」と言ってくれました。先生達の誰もが彼に従いました。先生というのは、生徒の生命力に気づき、それを引き出してあげるべきなのです。成績のよくない子供でも褒めることで自信をつけ、次へ次へと挑戦するようになります。実生活で子供の成長を広い心で補助し、人間性を育てる環境を整えることが大切です。

リーダーとは、常に人のことを考え、成長の過程を示しつつ、今すべきこととこれから向かう方向を示唆する人のことだと思います。》

○高橋　久子 ・・・ 主婦・国際IC日本協会理事。PTA会長や地域のボランティア活動の経験もある。

「何が正しいか、何ができるか」

《リーダーならずとも、リーダーシップを発揮できる例はいくつもあります。学校でいじめの問題が持ち上がり、無責任な校長と父兄が激しく対立したことがありました。しかし、まず一人ずつ話を聞く場を持ち、校長に自らの行動を謝罪することを勧め、双方の姿勢を反省したところ、最終的に相互に信頼を回復し、子供のために学校も親も共同して取組もうという合意を得ることができました。リーダーとは、相手のことを考え、その意図を汲み、自分が何かをするよりも、相手を受け入れる心の大きい人。また、「誰が正しいか」でなく、「何が正しいか」で判断することも大切です。社会のために自分が何ができるかを考えて、実行することがリーダーシップだと考えています。》

◇テーマ「ICで学んだリーダーシップ」最終日

最終日のプログラム「ICで学んだリーダーシップ」では、オーストラリア、ウクライナ、マレーシア、そして、韓国からのAfL（IC国際青年研修プログラム）の卒業生等による体験が語られました。

◆キム・チェナム（韓国）

私は韓国の大学のICクラブでICに出会いました。そこで自分自身について多くを学びました。それから私の人生は少しづつ変わってきました。私は、インドにあるICセンターに滞在した時、初めて自分の人生を生き、楽しむ権利があると感じました。　以前は、人の意見に左右され、自分の人生であるのに、そうではないような考えに陥っていました。いつも自分が本当にやりたいことをすることができませんでした。私は、以前の生活が自分のものではなかったことを後悔していました。そこで「静かな時間」を持った時、私はその考えを変える必要があると感じました。私は他人の意見を前のようには考える必要がなくなりました。私は考え始めました。それから、すべてがうまくいくようになりました。そして、心が充実してきました。　今はまだ自分の中に問題が沢山あります。しかし自分を励ましてくれる「静かな時間」とともにある瞬間をすべて楽しもうとしています。

◆クリスティーナ・デ・アンジェリス（豪州）

私は以前、人生とは楽しむものだと思っていました。私は今は、人生とは奉仕だと感じています。私は奉仕して初めて“奉仕こそ喜び”だと感じました。時に私は奉仕することに困難を感じます。自分は必要とされていないのではないか、誰も私を助けてくれず、注意を払ってくれないと思ったりします。また一歩踏み出すことへの恐れが躊躇させるのだと思います。　今年も、オーストラリアでは“ライフ・マターズ”（人生に関わる問題）という青年たちのためのプログラムがありましたが、その中で、ロック・クライミングがありました。カンボジアから来たある少女は、クライミングに対して恐怖心が強かったのですが、私は一生懸命応援しました。そして岩に登っている間じゅう励まし続けた結果、彼女は最後まで登ることができました。終わった後で彼女は、私の声がよく聴こえて励ましになったと言ってくれました。私の応援が彼女を後押ししたのです。リーダーシップとは、他人を思いやること、勇気を与えることだと思いました。そして、他人への奉仕とは何という喜びなのだろうかと思いました。今の私は、他の人が私にしてくれたように、自分もしてあげることができるようになり、本当に嬉しく思います。

◆ナンドール・リム（マレーシア）

IC（イニシアティブ・オブ・チェンジ）とはスローガンでもなければ、理論でもありません。これは、多くの習練と行動を伴う哲学のようなものです。　2005年のブリスベーンでのIC会議の時、80歳位の方から彼の経験を聞く機会を得ました。彼は戦争中、飛行兵として参戦し、その後、ICのフルタイム・ボランティアとして無給で働いてきて、もう50年以上になると言っていました。その際は驚くとともに、フルタイムとなって2年しか経っていなかった私はとても勇気づけられました。そして彼と散歩に行くと、彼は私がやっとついていける位の速さで、颯爽と歩き、素晴らしいエネルギーを持ち、自分のメッセージ通りに生きていると気づきました。彼の人生はまさに私にとっての一つの模範でした。　ICの人々はまさに真実を生きています。私はマレーシアにおいてそんな一人になりたいと思います。これまで40年間マレーシアICは、英語を話す人たちを中心に広まってきましたが、私は中国語を話す地域にICの活動を広げようとしています。3年前にようやく始めたのですが、クアラルンプールでは今や300人以上のグループとなりました。私は良心の声に従うことを学びました。内なる声を聞くことにより、何をすべきかが示されるのです。

◇ワーク・ショップ「今、求められる真のリーダーシップとは？」

“リーダーシップとは心からの行動”

主宰者　アリス・カデール（フィリピン）

〈プロフィール〉
1948年生まれ。MRA（現IC）の専従を経て、1989年から91年までは、フィリピンの外務大臣の特別補佐官（アジア・太平洋問題担当）を務めた。88年にコロンビア大学で公共管理学の修士号を取得、ニューヨークでコンサルタントの会社を起し、職業開発トレーナー等として活躍する。現在、スイス・ジュネーヴにあるIC事務局で国際機関のスタッフ等への訓練を行う部署のディレクターを務める。チリやペルー政府より外交に関する賞を受賞。

はじめに

私は15年間ニューヨークとジュネーブで働いてきました。1997年国連の600名の職員に対する「リーダーシップをとる上で何が大切か」という質問の中で、「人生の中で誰の影響を一番受けているか」という質問の回答を得た時、驚くべきことに親の影響が一番と答えた人が97%ありました。コロンビア大学の研究でも親から子供への流れということが大きな影響があることが示されています。リーダーシップとは、様々な議論ではなく“心からの行動をとる”ことが必要なのです。日本が国内のリーダーシップのことだけでなく、世界のリーダーシップを育て、リードしていくことを期待したいと思います。

◆ワーク１◆

ワークショップでは、まず図形選択の作業を行い、人々の価値感や感じ方が様々であることを知ります。グループの中に同じ考えの人もいれば、違う考えの人もいることを知ります。同じ図形を見ても、その評価は様々です。また、ある図形を選んだ人が、全体の中でたった一人であったことから、孤立感、独立心などの性格・感情の差なども知ることができます。

求めるリーダー像について話し合う

◆ワーク２◆

５つのリーダーモデルを示して、各グループにそれについて、どれが良いかを選んでもらい、その理由を話し合う作業では、グループごとに求めるリーダーシップ・モデルが見えてきました。

最後に、グループごとに“自分たちの求めるリーダー像とは”を話し合い、箇条書きにして全体に発表することで、全員の考えを知ることができました。

アリス・カデール氏のまとめ

リーダーとは、非常に創造力のある人のことです。リーダーシップにおいては、特に困難にぶつかった時にどのような行動をとるべきかが大切です。このために、“Bridge Model Way”（ブリッジ・モデル・ウェイ、BMW）という勉強法があります。孤立している人、または、互いに対立している人の間に橋をかける方法を学ぶ作業です。互いの心の底に横たわっている目に見えない部分にまで気づかうことができる人こそ、リーダーであり、心のケアができて初めてリーダーシップが有効になり、そこに信頼感や安心感が生まれてこそ対立がなくなるのです。もっと一つひとつの作業をまたの機会に一緒に勉強したいと思います。

◇閉会式

「この会議で私が学んだこと、アクションにつなげたいこと」

讃井 勝美（会社経営）

私は現在760年という伝統の博多織を継承しています。24の時、父が急死し、あとを継ぐことになったのですが、商売において信用がいかに大切かを若い頃は全く知りませんでしたし、仕入先へも傲慢な態度でした。しかしある時、自分が内心見下していた堅気の仕入先からの紹介で、銀行から無条件で融資してもらうことができたことがありました。信頼されている人の力というものを思い知り、その時初めて目が覚めた思いがしました。人から信頼を受けることが大切であり人の信用がないと絶対にだめだということが分かりました。真のリーダーシップとは、このように人に信用されることだと思います。それを気づかせてくれた母にも感謝しています。

山崎 俊哉（大学生）

今回初めて会議に参加しました。どんな会議なのか知らずに来ましたので、いきなり「静かな時間」と言われてびっくりしました。でも、この時間をとることが大切だと分かりました。今回の体験を通して、日常生活でも「静かな時間」を取り入れていくことで冷静になれると実感しました。これからも実行していきたいです。

池上 風美（大学生）

母の紹介で、初めて参加しました。母が家のトイレに〈正直・純潔・無私・愛〉（4つの絶対標準）を紙に書いて貼っていた意味が、会議に参加して初めて分かり良かったです。ICの良い点は、個人に重点を置いていることです。他の国々の人との交流も嬉しかったです。また参加して、今度は自分から意見を言えるようになりたいと思います。

“日韓の国会議員の団結”

リ・ジュヨン（韓国）

今回の会議では、得ることが多くありました。41年前に学生としてMRAのキャンプで初めて「静かな時間」を持ち、内なる声を聞いてから今日まで、自分もリーダーとなれるのだと信じて高校にMRAのチームを作るなど、MRA/ICの考えを通じて行動を続けてきました。現在、私は国会議員となりました。選挙では汚職が蔓延しています。そこで、自分は一切汚職をしないと宣言し、昨年大統領選で、選挙違反を取締まる役職を果たしました。ICの理念の力で行動し、ICの理念を普及するために、韓国では国会の中にもMRA/ICチームが作られました。日本のICも同じ動きが起っていることをこの会議で知り、大変心強く思います。日本と韓国の議員が互いに団結し、世界のために活動していけたらと思います。皆様のお力をお借りしたいと思います。

「閉会のことば」

谷川 和穂（元衆議院議員）

私は今回の韓国のリー・ジュヨンさんとの出会いを大切にし、これからさらに日韓の国会議員のつながりを大事にしながら、協力していきたいと考えています。フランク・ブックマン博士の誕生日は、6月4日です。人類は、崇高なものを考え、一歩踏み出しました。この3日間は皆さんがこれからの一歩を踏み出すための準備の日々でした。さあ皆さん、これから新しい一歩を踏み出しましょう。またお会いする日まで。

◆ IC 国際会議に参加した各国の代表メンバーによる

〈小田原の小学校訪問とホームステイ〉

IC メンバーによる小田原の小学校訪問は年々広がりを見せ、今回は、6 月 11 日～ 13 日にかけて、芦子、三の丸、足柄、国府津の 4 校を廻り、ホームステイをしながら深い交流を行いました。“心の中の良い心に耳を傾ける方法” や “他を指させば自分に 3 本の指が向いている” というお話は、子供たちの心に深く染みとおっていったようです。今回のメンバーは、クリスティーナ（オーストラリア）、オルハ（ウクライナ）、ヨンヌク（韓国）、チェナム（韓国）、チユン（韓国）、ナンドール（マレーシア）、ディノ（アメリカ / フィリピン）、ルシエンヌ（フィリピン）、エマニュエル（ケニア）の 9 名の青年たちでした。この交流の様子は、小田原ケーブル TV「15(いちご) チャンネル」にて 6 月 16 日の放送で取り上げられた他、小田原の<タウンニュース 6 月 21 日(土)号>でも紹介されました。なお、6 月 12 日には IC の良き理解者であり支援者である加藤 憲一小田原新市長を表敬訪問しました。

IC 国際ボランティアグループは子どもを変える魔法の力！

小田原市立国府津小学校　国際理解教育担当　鈴木 恒美

私の受持っている小学 4 年生は、ギャングエイジと呼ばれ、遊びや生活においてエネルギッシュに活動し、毎日トラブルの絶えない日々を送っています。しかし「6 月に入ったら、外国人と触れ合う活動をしよう」と提案したところ、子どもたちは素直に前向きに取り組み始め、「日本に来て良かったと思うように日本のモノを紹介しよう」とテーマを決めました。

折り紙細工をプレゼントしたい。折り方を教えたい。日本語を教えたい。けん玉を教えたい。国旗を調べて飾りたい。その国の「こんにちは」を何と言うのか調べたい等、子どもたちのそれぞれの取り組みは、普段の学習では見られない「優しく思いやりのある」輝きを感じました。

6 月 13 日当日、初めて外国人と接する子どもたちの顔が全員、外国人に向けられました。瞬きせずじっと手振り・身振りや英語に集中し、しっかりと聞き取ろうとする姿は今までにないことでした。誰一人無駄口をいうことなく、一緒に楽しくダンスをしました。「これはすごいことだ」と感じながら見守っていました。

オーストラリアのクリスティーナさんが「よい心に耳を傾けよう。どんなことが聴こえてきますか」と問いかけると、すぐに手を挙げた子どもがいました。アスペルガ（高機能自閉症）の子どもでした。「ぼくはいつも友達に強い口調で言ってしまうので、これからは優しく言いたいです」と発言しました。見守っていた介助の先生もびっくりしました。そして帰りには、お礼を言いに一人玄関で通訳をした佐々木君を待ち続け、「今日はありがとう」と言いました。さらに後で、「ぼくの夢は外国に住んで英語の勉強をすることです」と感想文に書いたのです。

IC の国際ボランティアグループの学校訪問をふり返って、子どもたちの変化について以下にまとめてみました。

○不登校の子どもがこの日以来、学校に来れるようになりました。

○英語が好きになり、もっと英語がしゃべれるようになりたい。

○ニュースを見るようになり世界に関心をもつようになった。

○外国人を誤解していた。みんないい人だな。

足柄小学校の先生方と共に（前列、右端が種村さん、後列、中央がナンドールさん）

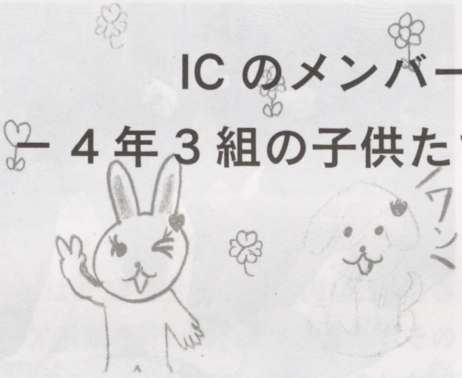
○外国へ行きたい。
○当たり前のことを外国人から教わってちょっと恥ずかしい、等々。

たった1時間の触れ合い活動で、毎日手を焼いている子どもたちがこんなに変わった体験は今回が初めてでした。4月から担任として、英語の歌やゲームを通して、「英語は楽しい」と感じる心を育ててきましたが、やはり「外国人と仲良くできる活動」は、子どもたちを一気に変える「魔法の力」があると確信しました。

英会話を教えるALT(外国語指導助手)ではなく、「人を育てることを目的とした外国人」(ICの国際ボランティアグループ)と一緒に過ごすことによって学級を建て直すことができたのです。学校は人間教育をするところです。このように世界の人々が手を取り合っていく時代になってきたんだなと肌で感じることができました。

あれからちょうど1ヶ月が過ぎました。教室には時々教わった歌が聞こえてきます。子どもたちは地球規模に立ち、洞爺湖サミットにも興味を示し、地球を守るために、今取り組んでいることを世界中の人々と情報交換したいと思うようになりました。そして、世界中の人と話せるように英会話をしっかり勉強したい、と今がんばっています。子どもたちは無限の可能性を持っています。夢や希望を持って、さらに前進できるように努力して参ります。ぜひ今後の子どもたちも見守ってください。

ICのメンバーのみなさんへ
ー4年3組の子供たちからのメッセージー



今回訪問した小田原市立国府津小学校の4年3組の子供たち全員から交流についての感想文が寄せられましたので、ほんの一部ですが、原文のまま紹介いたします。

◇わたしは、こんなたいけんは、はじめてで、とてもきんちょうしてて、でも本ばんの時では、お話が少しでき、かん国の人、フィリピンの人にさいんをもらいその時は、それは本とうにうれしくてたまりませんでした。

目をつぶっていい心に耳をかたむけた時は、とても小さな小さな声で、「お兄ちゃんにあやまんないといけないんじゃないの」とかすかに聞こえました。いままでは、いい心に耳をかたむけなかったので、勉強になったことと、これは、はじめてしったので、家の人にもおしえて、とてもとてもいいけいけんをさせていただいて、ありがとうございました。日本にきてくれてほんとうにありがとうございました。さようなら。

◇6月13日は、おせわになりました。わたしは、ICのみなさんにあえると思いませんでした。だからあった時は、とてもびっくりしました。わたしは、前は、人に、指をさしていたので、それで、そのことを、おしえてくれてありがとうございました。とてもみじかい時間だったのでもっとたくさんあそびたかったです。わたしは、英語がにがてなのでもっとたくさん英語で話せたらうれしかったです。わたしは、ほかの国に行ってみたいです。わたしは、いろんな国の人がどういうくらしをしているのかがしりたいです。日本のあたりまえなことが日本じゃない人たちにおしえてもらって、はずかしかったです。6月13日は、とても楽しい1日でした。またあいましょう。

◇きてくれて、ありがとうございます。ぼくは、どんな人が、くるか、しんぱいで、きんちょうしていました。だけど、みんな、いい人で、とても、よかったです。ほんとに、日本にきて、ありがとうございます。ぼくは、外国人をごかいしていました。みんな、少しずつちがうから、どんな人が、いるかとか、ちゃんと、話せる

感想文に描かれた絵

かとか、いろんな、しんぱいかんが、ありました。「やっぱりえいごはおぼえなきゃ」という気もちになりました。であう前は、きんちょうで、外国人は、ほとんどが、いい人ではないと思ったが、出会ったら、いい人だと思いました。ありがとう。さようなら。

◇この前は、ありがとうございました。みなさんが話してくれたお話で、わたしも少しだけかわることができました。わたしはピアノをならっています。みなさんがくる前は自分からすすんでピアノを練習することができませんでした。みなさんがお話してくれたおかげでわたしはみずからすすんでピアノを練習することができるようになりました。とてもいい話をありがとうございました。

国さいこう流楽しかったですね！また日本にきてくださいね。その時はもっと英語を話せるようになっておきますね。さようなら。

◇わたしはこの日のために、いろいろ英語を練習してきました。わたしは、こんなきかいがあまりないのでよかったです。

それに指をさしたら自分に３倍かえってくると言うのは本当だと思いました。あと心に手をあてて３分間自分の心に聞いてみました。そしたらオーストラリアの人と少しにていることがありました。それはよく姉とケンカをする事です。わたしは一番したの妹で兄と姉がいます。兄はよくぶったりします。姉はとってもケンカをします。またこのきかいがあればいいなと思いました。

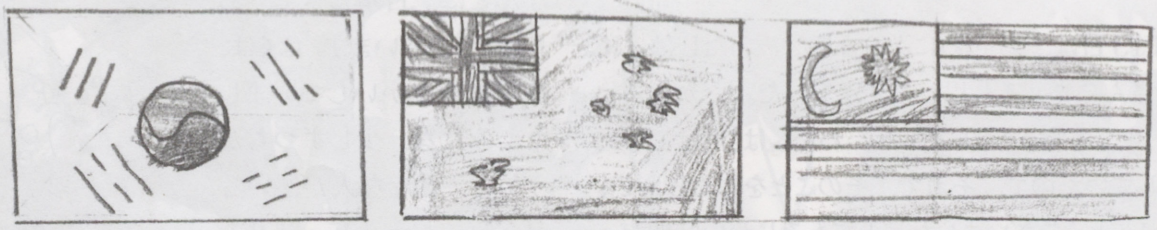
とおいところからきてくれてありがとうございました！ではさようなら。

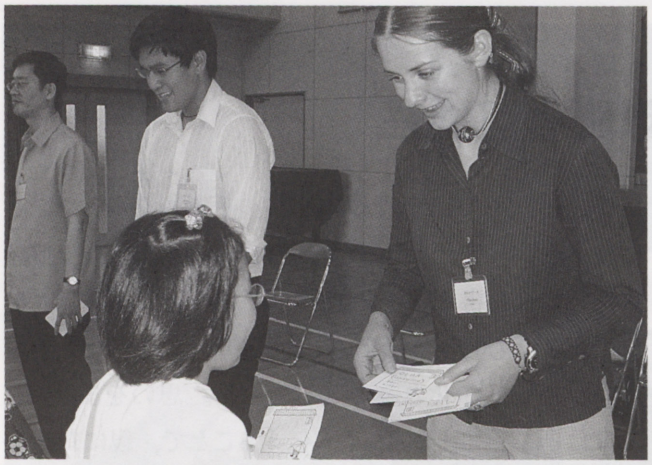
◇私は、はじめて外国人と会って、交流できて、とても、うれしかったです。それは、なかなか、このような体験ができる事は、少ないからです。「よい心に、耳をかた向けてください。」とおそわった時、私は手を上げて言えませんでした。でも、さいきん、ちょっと耳をかた向けると、声が聞こえてくるように、なりました。このように、私は、交流できた事が、とっても楽しいです。交流して、私は、世界に耳をかたむけるようになりました。また会いたいです。

私が、おとなになったら、こんどは、私が、会いに行きたいです！

子供たちとダンスを楽しむ（国府津小）

良い心に耳を傾けようとする子供たち（三の丸小）





手製の名刺で英語の自己紹介（足柄小）

ニュージーランドのマオリ族のダンスを習う子供たち（芦子小）

ホストファミリーを体験して

種村 邦子

今年も世界の若者たちが小田原にやって来ました。小学校を訪問するなどの活動の間、昨年に引き続きホームステイをお引き受けしました。

私は小田原英語ガイド研究会というグループで英語の勉強会や時には交換学生の市内案内などのささやかなボランティア活動を行っています。今回はその友人二家族もホストファミリーになってくれましたので、一緒に送り迎えをしたり、お互いの家庭での様子を聞いたり、地元の小学校で皆さんの活動の様子を見学させていただいたりして、2倍3倍実り多い4日間になりました。

我が家に来られたナンドールさんはソーシャルワーカーとして日々様々な問題を抱えた人々と接しておられるだけあって、すぐに打ち解けて心を開ける方でした。また中国系マレーシア人ということもあり、漢字も交えながらお話ができ、食卓での会話は、お国のマレーシアのこと、活動のこと、家族のこと、ロシア人形マトリョーシカから深層心理の話、映画「モリー先生との火曜日」、さらには般若心経へと広がっていきました。また彼が3年前に来日した時友人の家に滞在したことがわかり、その友人を交えての賑やかな餃子パーティーも楽しい思い出となりました。

ICU（国際基督教大学）での学生たちとの交流会

子供たちからおみやげにもらったたくさんの折り紙のプレゼントを開きながら、その日訪問した小学校での出来事を話してくれたナンドールさん。目を閉じて心の声に耳を傾ける静かな時間を持った後で一人の男の子が手をあげてぼくは変わろうと思うと発言してくれたと、彼は心底嬉しそうに話して聞かせてくれました。国の違いや言葉の違いを越えて、伝えたいことをうまく受け止めてもらえたという喜びが溢れていました。

私事ですが、2年前私たちは最愛の娘を24歳で病気で亡くすという大きな悲しみを経験しました。難病を持って生まれましたが、良い先生に恵まれ、上手く病気と付き合いながら大学を終え、社会人となり、自分の道を切り開こうと一生懸命に生きた娘でした。時が流れ私たちも落ち着いた静かな生活に戻りました。勇気を出してお引き受けしたホストファミリーの体験は私たちに嬉しい出会いをもたらしてくれました。娘と同じ年頃の皆さんが生き生きと楽しそうに次の世代の子供たちにメッセージを伝えようと活動されているのを見るのは大きな喜びで、私も元気を分けていただいているような気がしてきます。

《第 12 回ミニ HOHO in 唐津　レポート》

“世代を超えた無限の可能性”

去る３月１･２日に唐津シーサイドホテルにて開催された第 12 回ミニ HOHO には、福岡を中心に東京方面の参加者を含めて 40 名を越える参加者が集まり和やかな中に充実した時を過ごしました。

ミニ HOHO の柱である“ストーリーテリング”と“静かな時間”の体験、その上に台湾から参加のリュー・レンジョウ&グレース夫妻の講演とワークショップも経験できるという盛り沢山なプログラムでした。目の前に広がる静かな美しいビーチを眺めながらの話し合いは素晴らしい設定でした。

３～４人１組となり、一人ひとりの人生を聴く“ストーリーテリング”の経験は、何度行っても新しい人生に触れることができる上、自分の中にも新しい発見ができます。ある塾経営の方は、「忙しさに追われ、今まで自分を振り返りゆっくり考える時間もありませんでした。正直に素直に語り語られるお言葉を聞きながら、私は大切なものを見失っていたことを反省し、これからこの様な時間をたまに持ちたいと思いました」と語っています。

もう一つの柱である、台湾からのリュー・レンジョウ氏の講演とワークショップでは、“親への手紙”を書く体験をしました。20 代～70 代までの参加者全員が、自分の親への手紙を書き自己を振り返るというセルフ・カウンセリングのような体験をし、それをグループごとに読み合い、その後、今度は親になったつもりで自分自身に手紙を書くという手法です。30 代の男性は、「自分の親および自分自身への手紙を書くことにより、自分自身の心が浄化される感覚でした。思いをまとめて文章にして、それを声にして伝えることで、親に対する感謝の気持、自身へのいたわり、労いの気持が率直に感じられました」。また 50 代主婦は「私は親への思いを表現しないまま、ずっと心に抱えていたものがあったので、それが今回溶け出すのを感じています」と述べています。

静かな時間についてのリュー・レンジョウ氏のお話は分かりやすく、ご自身の体験をもとに話して下さいました。参加者からは、「MRA の出会いから丁寧に語って頂き良く理解できました。自分の心の声を聴くようにはしていますが、他のために、社会のために行動するのは難しいので、少しでも実践できるよう努力しなければと思いました」という感想が寄せられました。

また夫婦での参加が５組、親子が１組、と家族での参加が多く、家族内で同じ経験を共にし、会話も増え、お互いを良く知る機会となりました。ミニ HOHO での出会い、体験は、世代を越えて無限の可能性を秘めているとあらためて感じることができました。

第 13 回ミニ HOHO―心を育てるネットワーク―開催のご案内

日　時：2008 年 11 月 15 日（土）～ 16 日（日）

会　場：富士箱根ゲストハウス　〒 250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原 912

社会の場でも、家庭の場でも、心を大切にして自分の心のありようを時には立ち止まって、みつめることが必要です。心を開いて、人の声に耳を傾けると、自然に他の人の人生が心に入ってきます。自分の人生を語ることにより、自分を整理し、前に向かうことができるでしょう。生きる力の源となる心を育て、育て合う場が、ミニ HOHO です。

今回は 13 回目の開催となります。皆様のご参加をお待ちしています。（HP）http://www.initiativesofchange.jp/

＊日本ミニ HOHO に関するお問い合せは、（社）国際 IC 日本協会 事務局 まで。

中国国際交流協会代表団をお迎えして

橋本徹国際IC日本協会会長と高橋衛同理事とともに

去る4月14日から20日まで、李 連甫中国国際交流協会理事（前中国駐キューバ大使）を団長に、李 金中国国際交流協会機関誌「国際交流」編集者、王 琳中国国際交流協会アジア・アフリカ・オセアニア処副処長から成る第3次中国国際交流協会代表団の代表3名をお迎えしました。

橋本徹国際IC日本協会会長を始めとしたICメンバーとの率直な話し合いや、韓国での日中韓青年フォーラムに参加した日本の大学生や韓国の若い方々とのICハウスでの交流も行われました。李団長はご自分の留学時代の体験等も交え、若い人たちを激励してくれました。さらには、浦和では、榊たか子国際IC日本協会副会長を始めとした浦和のIC協会会員や同じく榊副会長が代表を務める日中友好さいたま市民会議のメンバーの方々による歓迎会も開かれ、和やかな雰囲気の下、友好が深められました。一行には、京都や奈良でもICの会員の案内の下、日本の伝統文化の一端に触れて頂きました。中国の方々がご自分のご家族のことについて語られる時など、悩みや心配事もほとんど日本とも変わらず、親しみがいっそう増す感がありました。

ICハウスでの青年たちとの交流（中央の3名、左から王琳さん、李連甫団長、李金さん）

◇◇◇ IC ニュース◇◇◇

■ 東北アジア青年フォーラム in 韓国

今年で５回目となる東北アジア青年フォーラムが韓国で開催されます。「国際化の中でのアジアの平和と発展」をメインテーマに、８月26日から31日まで５泊６日の予定で、日本・中国・韓国の若者たちによる活発な討論・交流が行われます。これからも若者たちへのご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

また、このフォーラム参加者による報告会を９月27日（土）に予定しておりますので、ご期待ください。

なお、フォーラム等の情報は、当協会ホームページに掲載しますので、併せてご覧ください。

(HP)http://www.initiativesofchange.jp/)

■イレーヌ・ロー夫人の功績が紹介されている本が出版されました。

戦後の独仏の和解に貢献された、IC のパイオニアの一人であるイレーヌ・ロー夫人のことが紹介されている本『ドイツはなぜ和解を求めるのか－謝罪と戦後補償への歩み－』（菅原秀著、同友館、本体 1,800 円、ISBN978-4-496-04414-4）が出版されました。ご関心のある方は、書店でお求めください。

《学生インターン・ボランティア制度について》

国際 IC 協会では、インド IC センターやスイスでの国際会議でインターンやボランティアとして、IC の会議の運営をサポートする活動を行いながら、IC の精神や活動、語学などを学んでいく機会を提供しています。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

《入会のご案内》

IC (Initiatives of Change イニシアティブズ･オブ･チェンジ、前身は Moral Re-Armament(MRA)) は、1938 年にロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分や自国から変わるべきである」という理念に基づき、あらゆる民族、宗教、文化の根底に流れる共通の倫理観（モラル）を普遍的な絶対基準（正直、純潔、無私、愛）にまとめ、それを基盤に紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。

当社団法人国際 IC 日本協会では、1977 年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国の IC 国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等内外で様々な事業を行っています。また皆様からの会費及び寄付金により本協会は運営されています。一人でも多くの方々との相互交流を望むと同時に、集められた浄財により、内外の未来を担う青年たちの育成に寄与することを希求しております。何卒ご協力の程お願い申し上げます。ご入会された方には、各種会議やイベントのお知らせの他、機関紙等をお送りいたします。ご入会を心よりお待ちいたしております。

《編集後記》

今号は６月に開催した IC 国際会議のレポートを中心に編集させて頂きました。会議は来年も開催される予定ですので、ご関心のある方は IC 事務局までご連絡ください。尚、本機関誌に関してご意見等がございましたら、（社）国際 IC 日本協会までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

編集企画委員：高橋久子、中嶋邦子、長野清志　編集担当：海老原真美